

地震と津波のあとに 日本のコウ・カウンセラーに資源を送る

3月11日に起きた日本の東北での地震と津波の一週間後、私たちはRCの国際コミュニティから日本のコミュニティに大至急に資源を送る事を決めました。この地域に住んでいた何人ものコウ・カウンセラーが直接的な被害を受けました。その上、初めの2、3週間は原発事故とそれによる放射能漏れが続いて、より大きな爆発や日本中に放射能が広がるような事態になるかどうか、はっきりとわかりませんでした。

私たちは既に電話でのサポートをオーガナイズしていましたが、この災害による莫大な破壊の規模、地震と津波で命を落とした人々、そして、引き続き原発事故の危険性ということを考えて、日本に直接リーダーを送りたいと思いました。初めから、原子炉はかなりの被害を受け、放射能が漏れているということ、そして、その被害を最小限にとどめる事はかなりの挑戦だということも明らかでした。

私たちは、みんなが早い段階で集まって、この危険な状況と、それによって再刺激されるとも幼い時の恐怖をディスチャージして、このような危機的な状況下で自分にとって一番良い考えが使えるようになってほしいと思いました。恐怖でまひしてしまい、家族や友達だけとしか近くに居続けられなくなり、即急にみんなが集まりディスチャージする事の大切さを忘れてしまうのではないかと心配していました。それと同時に、日本政府や原発の所有者（東京電力）が、被害や危険性の深刻さを正當に伝えないことを知っていましたし、

日本人にかかっている抑圧を考えると、雇用者や政府の方針に従う事なく自分の考えを持つために闘う事が難しい事も知っていました。

5つのワークショップ

日本のRCコミュニティは突然のワークショップをオーガナイズしてほしいというリクエストを受け入れ、3月29日にテレサ・エンリコ、日比野ゆうこ、そして、私たち二人、(ダイアン・シスクとチャック・エサー)¹が日本に飛び、5つのワークショップをリードしました。ワークショップは九州、大阪、東京、山形、そして北海道

¹ テレサ・エンリコはアメリカ合衆国、オレゴン州、ポートランドのARP（地域照会者）であり、またフィリピン人の国際解放照会者です。日比野ゆうこはシアトルに住むRCのリーダーです。ダイアン・シスクはRCコミュニティ国際照会者のオルタです。チャック・エサーはファミリーワークの国際共通照会者です。

で行われました。テレサと私（チャック）がチームになって大阪と北海道に行き、ゆうこと私（ダイアン）がチームになって、九州、東京、山形に行きました。

およそ210人の人がワークショップに参加しました。ほとんどの人がその地域に住んでいる人たちでしたが、中には東北から避難していた人や、(何人もの人が福島や、仙台、その他の大きな被害を受けた地域に住んでおり、安全に自分の家に帰る事が出来なくなっていました。) 今後、更なる被曝の可能性が高い地域から避難してきていた人もいました。

ディスチャージするのを助ける

私たちの一番の目標はみんながディスチャージをすることで、集まった人たちはそうする準備ができていました。みんな、3月11日の事やその後の影響について、自分がどこにいて何が起きたか、または何をテレビで見たか、東北地方にいる自分の家族や友達から何を聞いたかというところから始め、ディスチャージしました。亡くなった命と、決して同じように元に戻る事のない町や美しい田舎の風景などについて沢山の悲しみがディスチャージされました。

現在の悲しみや恐怖から再刺激されている古い傷の記憶や、幼い頃の恐怖や敗北感について取り組む機会が必ずあるよう心がけました。今までに経験した他の大きな地震の記憶や、広島と長崎の原爆について取り組んだ人もいました。ディスチャージをして何が安全かに



JO PERRY

TEACHING, LEADING, COMMUNITY BUILDING

ついて自分自身の考えを持ち、たとえ他の人が同意しなかったとしてもその考えのために立ち上がるという事にも挑戦してもらいました。

「地震」や「津波でサーフィンする」というゲームや歌を作って、ワークショップの間中それを使う事で、みんながディスチャージし続けられるように雰囲気軽くすることを心がけました。危機的な状況の中、ほとんどの大人は若い人へのアテンションが少なくなってしまう中で、どうやって若い人のことを考えるかにも取り組み、この件についてパティエ・ウィッフルー² が書いた文章をシェアしました。

避難するかどうか

ティムが日本のコウ・カウンセラーに向けて書いた手紙(2011年4月のプレゼントタイムの3ページ参照)は、ディスチャージして、危険性を査定して、政府からの勧告がなくても避難する事を考える事を励まし

²パティエ・ウィッフルーは親の国際解放照会者です。

たもので、それからとても大きな影響を受けた人もいました。何人かの人は福島原発の周辺から避難しました。最初の数週間は原子炉の状態が安定していなかったため、東京や他の場所からさえ避難した人もいました。この避難の問題はとても大きなもので、そのことについて考えるためには、自分自身の恐怖の他にも沢山の事をディスチャージする必要がありますがありました。

- * ほとんどの人は避難するための資源がなかったため、避難が出来る状態にいる人は自分自身の身を守ることに罪悪感を感じました。
- * 自分の家、仕事、避難をしたくない家族や友達を残していく事は難しいことでした。
- * 津波や原発の地域の外では、何も悪い事は起こっていないという風に行動するようにとても大きな圧力がかかっていた。もし危険があるという風に行動しようものなら、その人がまる

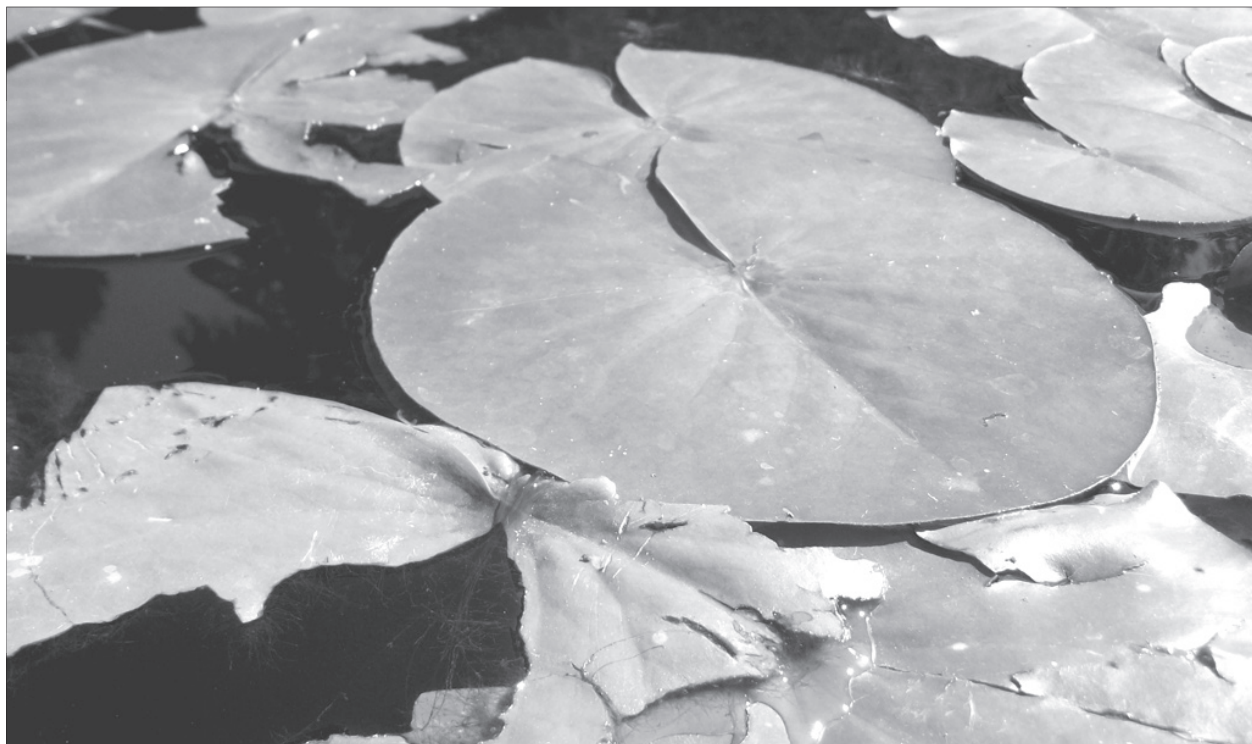
でどうかしているかのように扱われました。

- * 雇用主からは、避難をしないように、そして早く家に戻って仕事に復帰するよう圧力をかけられる人たちもいました。

まだ(もしくは一生)自分の家に安全に戻る事が出来ないコウ・カウンセラーにとって避難、そして自分の生活を再建する事は大きな課題となっていて残っています。そして今まだなお続く放射能汚染もまた、日本全体の問題として残っています。

私(チャック)は、引き続きのワークショップをやるために6月に日本にもう一度行きます。

ダイアン・シスク
アメリカ合衆国、ワシントン州、シアトル
チャック・エサー
アメリカ合衆国、ペンシルバニア州、
フィラデルフィア
翻訳 荒尾日南子



AMANDA MARTINEZ